

はじめに

吉見俊哉

世界各地から来た観光客であふれるオックスフォードの大通りから少し逸れて、この大学が誇る中世からの伝統あるカレッジの校舎に入ると、そこにはもう数百年もまったく変わらぬ姿で存在する時間があった。オックスフォード大学には三八のカレッジが存在するが、その約半数は一七世紀以前に設立されたものである。つまり近代以前からそれらのカレッジは存在し、石造りの回廊や教会堂、研究室と教室を何百年も変わらぬ姿で保っている。

本書で論じていくように、オックスフォード大学の強さの根幹は、この中世から変わらぬ姿で存在するカレッジに知的共同体としての大学と、近代に発達するファカルティーに学部・研究科、そしてグローバル化する現代世界の中で新しい組織を立ち上げ、資金調達や対外交渉を担っていくユニバーシティーを並立させ、互いの緊張感を保ちながらバランスよく機能させている点にある。つまり、大学という組織が経験してきた三つの歴史的時間がそ

のまま現存し、それらの異なる時間をつなぐ仕組みを発達させているのである。

東京大学を去って長くオックスフォード大学で教えてこられた荻谷剛彦氏と対談で本をつくってみたいと思うようになったのは、二〇一七年から一八年にかけて、私が約一年間、ハーバード大学で教える経験をする中でのことだった。たった二学期ではあるが実際に授業を担当してみることで、私は東大とハーバード、というか日本の大学教育と米国の大学教育の間にある質的、構造的な差を実感した。本書で何度も強調するように、この差は学生のクオリティーの差ではまったくない。そうではなく、大学についての根本的な考え、そこから来る授業をそもそも成り立たせている制度的な仕組みの違いである。

すでに私は、ハーバードでの経験から考えたことを、同じ時期にアメリカ社会を大混乱に陥れていた（今も陥れている）トランプ政権についての経験談と併せ、『トランプのアメリカに住む』（岩波新書）にまとめている。米日の大学間にある距離が、単に資金とか英語力の問題ではなく、むしろ大学に対する根本的な理解にあることを、そこでは具体的な経験として示したつもりである。本書の対談が示すように、ハーバードとオックスフォードの間には、同じ英語圏のトップユニバーシティーでも、一般に思われている以上の違いがある。とりわけ、ハーバードのカレッジⅡ学寮を基礎にした学部とオックスフォードのカ

レッジは同じではない。だが、両者の共通性もまた大きく、とりわけそれは大学が学生の何を育てるところであるかについての理解に集約される。大学が単に専門知識を学生に詰め込む機関ではなく、専門知に基づいた知的想像力を育む空間であるのなら、そこでの教育はいかに営まれなければならないのか。——この点についての英米の大学の認識は一致しており、おそらく日本の大学だけが世界の中でも例外的に逸脱している。

『大学はもう死んでいる?』という本書のタイトルは、疑問形で語られる。もう死んでいるのか、まだ死んではないのか、答えは確定していない。瀕死ひんしの状態なのは日本の大学だけでなく、世界の多くの大学で、とりわけ人文社会科学系の学問は厳しい状況に置かれている。そしてこの困難は、中世都市のネットワークを基盤に一二、一三世紀に誕生した第一世代の大学が一七、一八世紀には衰退に向かい、やがて一九世紀にフンボルト原理（研究と教育の一致）に基づく第二世代の大学の誕生を迎えるという歴史の中で考えられなければならない。今、瀕死の状態にあるのは近代国民国家を基盤としたこの第二世代の大学であり、そこで発達した近代知である。そして問題は、この瀕死の先にある再生、未来の地球社会の中での第三世代の大学の姿を、私たちがまだ知らないことにある。

だが、本書が明らかにしていくように、それ以上に深刻な問題もある。それは、私たち

が当たり前のように受け止め、戦後は約五〇校から約八〇〇校にまで大増殖させてしまった日本の「大学」が、どうやら世界的に通用するユニバーシティとはかけ離れたものになっていて現状だ。実際、戦後の日本は、それまで世界的な水準だったかもしれない旧制高校⇨カレッジを占領期改革で潰し、技術立国のための専門教育に邁進し、昨今ではユニバーシティの機能と「学長のリーダーシップ」を取り違えている。多くの大学教員は、カレッジもユニバーシティも脆弱ぜいじやくな中で、唯一の安心できる居場所として今もフアカルティ⇨学部・研究科に固執している。もちろん、これは大規模総合大学に限った話で、中小の私立大学では、学長や理事長の「リーダーシップ」が他を圧している場合もある。いずれの場合も、日本の大学ではユニバーシティが未発達である。

要するに、日本の大学は二重の意味で「もう死んでいる」かもしれないのであり、問題の根は、一般に考えられているよりもはるかに深いのだ。この日本の大学の絶望的な谷間から脱出する方法は簡単ではない。逆転スリーランホームランのような決定打があるわけではないからだ。しかも問題は折り重なり、絡まりあっている。しかし、オックスフォードと東大の、あるいはそこにハーバードも加えた比較の中で、日本のトップレベルの大学がなかなか抜け出せないでいる問題の根幹を浮かび上がらせることはできるはずだ。

そうした思いから、本書では六つの補助線を引いて対談を進めた。第一は大学改革、第二は授業、第三は職員、第四は文系と理系、第五はグローバル化、第六はキャンパスである。荻谷氏と私は、英米の大学と日本の大学の間には、とりわけ授業と職員のあり方で決定的な違いがあると考えている。それがどんな違いなのかを、対談では詳しく論じた。

他方、文理の関係やグローバル化の問題は、ここ数十年で世界中の大学が直面するようになった課題である。しかし後者について、英語圏の大学は非英語圏の大学に比べて特権的に優位な立場にある。また、専門分野で縦割りにならないカレッジの仕組みを残している英米の大学は、新しい複合的な知を育む未来への基盤をすでに備えている。これらの条件を多くが欠いているという意味で、日本の大学の困難はさらに大きい。

第一章以降の対談は、この困難に向けて開かれる。四日間にもわたる対談は、オックスフォード大学の中の荻谷教授室で行われた。片側の窓がサンルーフのように天井まで開き、日光が燦々と注ぐ部屋だった。対談の合間には、私たちは中庭や、時には近くの川辺の牧草地を散歩した。オックスフォードはそれなりの規模の都市なのだが、建物だけでなく川辺の自然も、数百年の時を超えて残されていることに感銘を受けた。この大学の学問的卓越性の基盤は、こうした長い時間的持続の大切さを人々が共有していることにある。

第一章 問題としての大学

東大が「蹴られる」時代

吉見 最近、東京大学に合格して、なおかつハーバードやプリンストン、イエール、オックスフォードなど英米のトップユニバーシティーにも合格するという学生が少しずつ増えています。「東大新聞」が彼らにインタビューして「蹴られる東大」というシリーズをオンライン版で連載していたんですが、これがなかなかおもしろい。「東大受験はアメリカの大学の受験を許可してもらえよう親を説得するための条件だった」「アメリカの大学では全落ちの可能性もあったため、浪人を避ける意味合いもあって、東大を滑り止めとして受けた」「東大へ半年でも行っていろいろコネクションをつくっておいたほうがアメリカの大学を卒業して帰国した時、就職に有利だろうと判断した」など、東大の教員にとっ